

□海外文献紹介□

早期胃癌および前癌病変における
p 53 の表現型

Expression of p 53 in early (T1) gastric carcinoma and precancerous adjacent mucosa: Brito MJ, Williams GT, Thompson H, et al (Gut 35: 1697-1700, 1994)

p 53 の異常は進行癌の約 6 割に認められ、胃癌の予後因子としての役割が評価されている。現在まで早期癌についての報告はなされておらず、今回 95 症例の早期胃癌および癌に隣接する前癌病変について p 53 の免疫染色を行い検討した。抗体は wild および mutant p 53 を染めるポリクローナル抗体 CM-1 で、ホルマリン固定 24 時間後、ABC 法 CO-DAB 発色で行った。

核が染色されており、全体の 25% 以上が染色されているものを陽性とした。

結果として、全体の 35% が陽性であった。組織型では分化型が 46% で、未分化型 10% に比べ有意に高い値を示した。肉眼型では隆起性病変で陥凹性病変より高い値を、発育形式では粘膜下へ深く浸潤しているものが高い値を示した。癌に隣接する前癌病変と考えられる high grade dysplasia では、26 症例のうち 15% に陽性が認められ、一方、腸上皮化生粘膜、正常粘膜では認められなかった。

今回の検討では、第 1 に、high grade dysplasia → early gastric cancer → advanced gastric cancer への進行と共に p 53 の陽性率が増加

することは、p 53 の異常が胃癌の progression へ関与していることを支持する所見と考えられた。第 2 に、早期胃癌において、陥凹性病変で組織型が signet-ring cell のものは metastatic potential が低く、隆起性病変で組織型が tubular あるいは papillary のものは高いことが示され、p 53 陽性率との間に相関が認められた。また、通常のルーチン業務で予後マーカーとして p 53 を利用するには不十分と考えられたが、一方で胃生検において high grade dysplasia と gastritis の所見を鑑別するには有用と考えられた。

(愛知県がんセンター消化器内科

新田 康夫 抄)